ダン・トゥイー・チャム著　高橋和泉訳

# 『トゥイーの日記』

経済界　2008年　237ページ

寺本（てらもと）　実（みのる）

ベトナム戦争終了後35年の月日が経った。トゥイーは1942年11月26日，ベトナムの首都ハノイに生まれた。1966年にハノイ医科大学を卒業し，眼の外科手術研究課程に進学する資格を持っていたにもかかわらず，志願して当時の激戦地・南ベトナムのクアンガイ省に赴任した。本書はベトナム戦争に従軍した若き女性医師トゥイーの日記である。

原語版は2005年6月18日にハノイで出版され，ベストセラーとなった。評者の知る範囲では本書のほか，英語（2007年），ラオス語（2009年）でも翻訳，出版されている。

日記はハノイ出発時からつけ始められた。しかし，最初の部分は失われ，1968年4月8日～70年6月20日の部分だけが残った。1970年6月22日，敵兵に撃たれ，トゥイーは命を落としたのだ。

トゥイーはこの日記に何を込めたのだろう。彼女は日記についてこう記している。「この小さな日記帳に，いったいいつまでこんな血なまぐさいページが書き連ねられるのか。でもトゥイー，書き続けなさい。この20年間，私たちの仲間が流し続けた血と汗と涙のことを。そして命をかけたこの戦いが終わるとき，書き残す意味，思い出す意味はもっともっと重いものになる。なぜならこの長い道のりの最後，ようやく目的地にたどり着くという日に，私はこの世にいないのかもしれないのだから」（1968年8月4日）。「日曜の午後には一緒に『世界の音楽』を聞いて，日記を書いて…たとえ，戦争が続いていても，夢のある日々を過ごしたい」（1969年1月19日）。「私は戦争の罪悪についての詩を書こうとした。何百万もの純粋な愛，何百万もの幸せを握りつぶす罪悪。でも，私には書けない。私のペンはこのひとつのでき事についてすら，自分の五感のすべてを表現できないのだから」（1969年7月29日）。「しばらく日記を書かなかった。ここでの生活は，考える事の好きな私の思考力を失わせているのだろうか？ いや，そうはなりたくない。けれど，仕事に忙殺される日常，同志たちの痛ましい死が，私の本質を忘れさせてしまうのだ。でも，この日記は私個人の生活を綴るものではない。戦火の中のひとコマを，南ベトナムの人たちの負った深い傷を記録したページでなければいけないのだ」（1969年10月20日）。「激しい抗戦のもっと凄惨な光景を，私はまだ知らない。そもそも生と死のすべてを書き記すことなどできないし，おそらくはそうするべきではないのだろう。私は手紙にも，自分の体験した苦しみを書き連ねることはない。苦しみを語ることによって，大切な人たちをいっそう不安にさせることは何の意味もないからだ」（1970年6月14日）。

トゥイーにとって日記を認める行為は，過酷な職責からほんの少し解放されて等身大の我に返り，自身を見つめるとともに，自身が存在するか定かでない未来にむけて自身の存在を証明する行為であったのではなかろうか。それだけに，日記が記されていない日付の多さは沈黙の内に多くのことを物語る。

日記には，戦況・任務についてだけでなく，恋心，愛，友情，家族への思い，悩み，自身への問いかけと励まし，国への思い，使命感，誇りが刻まれている。自己を凝視しつつ吐露される思いと内面的な葛藤，せつなさは，厳しい状況に置かれてもなお均衡を失わないしなやかな彼女の心根と感性を伝えている。日記とはいえ，なお抑制を保ちつつ綴られているがゆえに，かえって読者は彼女に共感，共鳴し，引き込まれていくのではなかろうか。

過酷な状況に身を置きながら，人間としての営みをなお放棄せず，一所懸命，誠実に生きようとしたトゥイーの姿勢は，今を生きるベトナムの人々をはじめとする多くの読者を優しく励ましているように感じられる。

「たとえ幾多の困難や危険がおまえを脅かそうとも，いつも口元には微笑みをたたえていなければ」（1969年6月5日）。本書カバーと表紙に印刷された写真のように，トゥイーは読者に笑いかけている。

（アジア経済研究所地域研究センター）